

(資 料)

## 授業アンケートに基づく 情報教育内容の検討

高橋 宗・村田栄子・青木芳織

### 目 的

新学習指導要領の実施によって、小・中学校においても情報処理教育が本格的に実施されるようになり、その教育経験を持つ学生が大学に進学するようになってきた。その意味から考えても、現在、大学で実施されている情報教育のあり方について、時代に対応しているかどうかが問われだしている。

白井・他(1995)が女子大学と短期大学の学生に調査した結果でも、94%の学生が、これからの社会ではコンピュータ等の情報機器を操作することができる必要性を回答している。したがって、大学入学後の情報教育に求めるものとして、アプリケーションソフトの操作や検定資格を得ることを求める傾向が高まっている(高橋・他、1994; 河口・他、1995; 小嶋・他、1995)。そのような中で、コンピュータに対する学習期待の上昇が、学習効果として十分に反映されているかどうかについて、問題提起されるようになった。この課題について検討する場合、カリキュラムのあり方や授業内容との関係にも焦点をあてなければならない。そのためには、まず授業に対する学生の意識を把握し、それを分析かつ検討する必要性が生じている。そのようなことから、情報教育系の分野においても学生の授業評価とカリキュラム内容との関係を検討する研究がみられるようになってきた(西村、1995; 玉田、1995; 山田・他、1995)。

一方、大学の自己点検評価は、大学設置基準の設定実施（1991,7）によって、全国の大学において実施されるようになった。点検・評価の項目は大きく7項目に分かれており、教育の研究業績や教育実績、国際交流や社会との交流、大学のビジョンや目標、財政といった内容が含まれている。学生による授業評価は、教育実績（教育評価、卒業者の進路、卒業生数）に該当する。本学では今まで大学全体としては実施されていなかったが、情報センターでは情報リテラシー教育の推進のために、カリキュラムや機器のあり方などを検討する必要がある、3年前から独自に実施してきた。ただ、授業評価の試みは、今までの大学教育のあり方とは異なるので、実施にあたっては戸惑いを生じやすい。特に教員にとっては、授業内容を評価されることに抵抗を感じる人も多いし、学生にとっても、それが意味することについて、今だ十分な理解が得られていない状況でもある。しかしながら、授業評価の試みは年々各大学で実施される中で、得られた情報をどのように利用するか。また、新しい授業形態のあり方を生み出す手段として活用することができるのか、といった問題に焦点がうつりつつあるといえる。

本学の情報センターで実施している授業アンケートは、情報系の実技科目を中心としているために、演習形式授業のものがほとんどである。このような情報系科目の授業評価について、西村（1995,1996）は演習科目と講義形式の場合とは質問すべき項目として、尺度的に異なる側面があるので検討が必要であると述べている。確かに講義と演習では、授業の進め方などにおいて異なる場合が多いと考えられる。しかし、今回の調査では両者に共通する要素を調査項目として考え、それに基づいて、学生の評価内容を検討することにした。

本報告では、新学科開設前と後についても検討する意味から、1996年と1997年に実施した2年間のデータに基づいて、情報系の授業についての実態を把握し、今後の指導上の問題点などについて検討することを目的とした。

## 方 法

### 1. 調査対象

本学の1～2年生における情報系科目受講学生に（1996年度は1年生423名、2年生134名、不明1名、合計558名；1997年度は1年生299名、2年生115名、不明5名、合計419名）に対して調査を実施した。なお、学科内訳は、1996年度、英語科85名、商経科472名、不明1名で、1997年度、英語科87名、商経科234名、情報社会学科95名、不明3名であった。また、性別の内訳は、1996年度、男子が149名、女子が409名であり、1997年度、男子が164名、女子が252名、不明3名であった。

### 2. 調査票

本調査のために「情報教育関係授業アンケート」と題した調査票を作成した。調査票にはフェースシートとして、所属学科、学年、性別、出身高校の過程（普通科、商経科など）の4項目を設定した。授業内容について①シラバスなどの事前学習に関する項目が2項目、②テキストや黒板などの教材・機器に関する項目が2項目、③欠席や予習復習などの学習態度に関する項目が2項目、④教え方がよかったかといった教授法に関する項目が2項目、⑤授業に対する満足度に関する項目が3項目の計11項目からなっており、いずれも4段階で判定できるように作成した。

### 3. 調査実施日と手続き

調査は各年度とも第1セメスター最終授業（7月）の開始時に実施した。被調査者に上記の調査票を配布し回答を求めた。回答に要した時間は10分から15分程度であった。

## 結 果

### 情報教育科目に対する関心度

まずはじめに、情報教育の授業を受講している学生が、情報教育に関する知識や技術の習得について、どれくらい関心をもっているであろうか。情報教育への関心度を調べるために、資格や技術を持っていることが就職に有利かをたずねた結果が図1である。質問結果によると73.7%

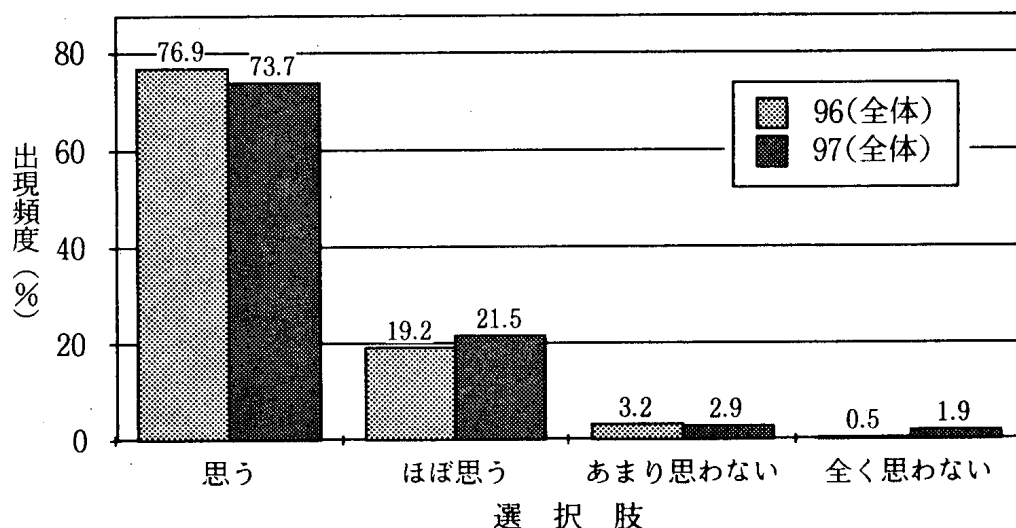


図1 「コンピュータの資格・技術は就職に有利か」  
の各選択肢に対する出現頻度

の学生が就職に有利であると思っており、ほぼ有利であると思っている学生を加えると95%を占めている。この傾向は前年度の1996年との間での比較でも、やや減少するものの差がほとんどみられず同じ傾向を示している。また男女間における違いもみられなかった。ただ、学科別にみると、特に有利と思っているのは、情報社会学科の82.1%に対して、英語科は73.6%、商経科では70.9%と学科間に差がみられた。しかし、全体の傾向として検討するならば、全学科の学生がコンピュータの知識や技術を習得することが就職時に役立つと考えており、他の調査研究で報告されているのと同じ結果が得られた。このことから、情報系の科目を

学びたいといった期待を学生達は強く持っており、それが、情報系の科目に対する関心を高めているのではないかと推測することができる。

そこで、この関心がどのようなものであるかをもう少し詳しくみるために、授業を受講するための目標や受講計画を組み立てる手段として利用するシラバスを、授業の前にどれだけ読んでいたかについて調べてみた。それによると、シラバスをよく読んでいた学生は12.9%で、前年度の1996年に比べてやや減少している（図2）。ただ、ほぼ読んでいたと

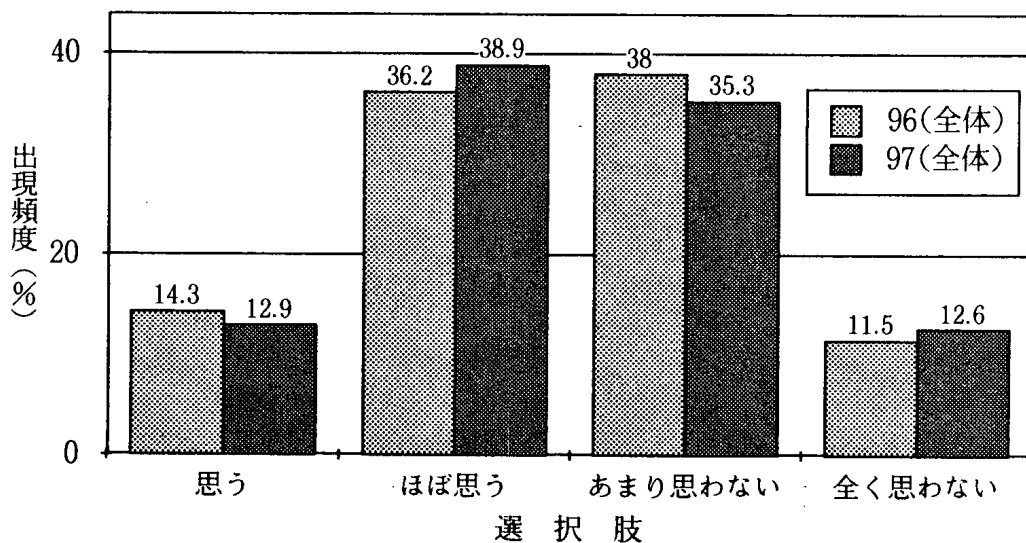


図2 「シラバスを事前に理解していたか」の各選択肢に対する出現頻度

思うといった肯定的な回答をした学生を加えると、全体の半数にあたる51.8%になっている。この傾向を男女間で比較してみると、女子学生が56.5%と男子学生よりも11.9ポイントも高く、事前の心構えをするためにシラバスに目を通す傾向は、女子学生に多いことが判った。このように、学生にとって非常に関心の高い情報系の科目にもかかわらず、授業を受けるための自己準備として、シラバスを十分に読む学生は全体の47.9%にすぎなかった。このことは、シラバスが十分に活用されていないといった予測が成り立つものであり、今後の一つの課題であるといえる。

## 学習意欲の傾向

学生の情報系科目に対する関心は高いが、授業を受講する態度として、自ら積極的に学ぼうとしているだろうか。そのような学習意欲をみるために、予習や復習などの時間外での学習態度の傾向をみたのが図3である。時間外に自己学習を行い、意欲的に取り組んだと考えている学生は23.9%。ほぼそのように取り組んだと思っている学生を加えると61.8%で、前年に比べ3.0ポイントとやや増加した。それに対して、あまり熱心に取り組まなかったと考えている学生は37.7%で、全体の1/3程を占めている。

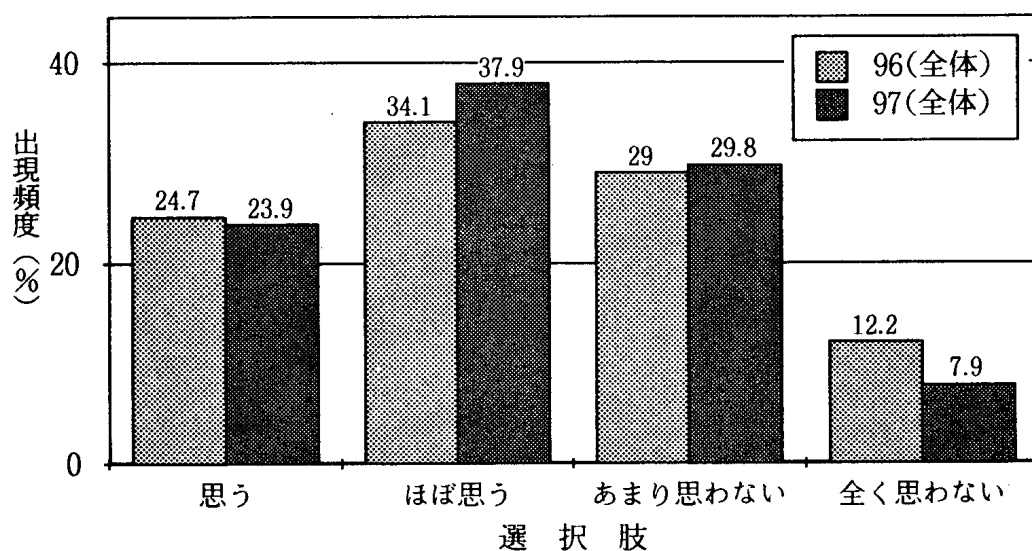


図3 「授業時間外にも意欲的に取り組めたか」の各選択肢に対する出現頻度

表1 学科別による授業時間外への取り組みの傾向

「意欲的であったか」	「所属学科」				
	人数	全体	英語科	商経科	情報社会学科
そう思う	100	24	20.7	20.3	35.8
ほぼそう思う	159	38.1	36.8	40.9	33.7
あまり思わない	125	30	36.8	30.6	22.1
全くそう思わない	33	7.9	5.7	8.2	8.4
不明	2				
合 計	419	100	100	100	100

男女間の比較では男子学生が54.0%、女子学生が67.3%で13.3ポイントの差が生じている。これを学科別にみたのが表1である。情報社会学科では意欲的に取り組んだと思っている学生が35.8%で、商経科や英語科に比べて15ポイントも高い傾向にある。また、ほぼそのようにできたと知っている学生では商経科で40.9%を占めている。それに対して、英語科では時間外学習が少ない傾向にあることも判った。ただ、情報社会学科では、他学科に比べて授業以外に課題学習が多く求められることから、必然的に自己学習率が高くなる傾向にあるとも考えられる。

一方、学習意欲をはかるもう一つの尺度として考えることのできる、出席状況をみたのが図4である。それによると、授業には全て出席したと回答している学生は47%。これを前年度と比べると3.5ポイント減少している。そこで、1～2回の欠席をしたと回答している学生の出現頻度をみると、46.1%で全体の約半数の学生が欠席をしていることが判った。この傾向は、男女間でも同じような傾向がみられている。しかし、授業に意欲的に取り組んだと考えている学生の場合では、54.4%が全く欠席していないと回答している。しかし、意欲的な取り組みができなかった学生の場合は34.2%であることに比べて高い傾向にあることから、学習意欲が出席率を高める結果になっていると判断できる。これを学科別

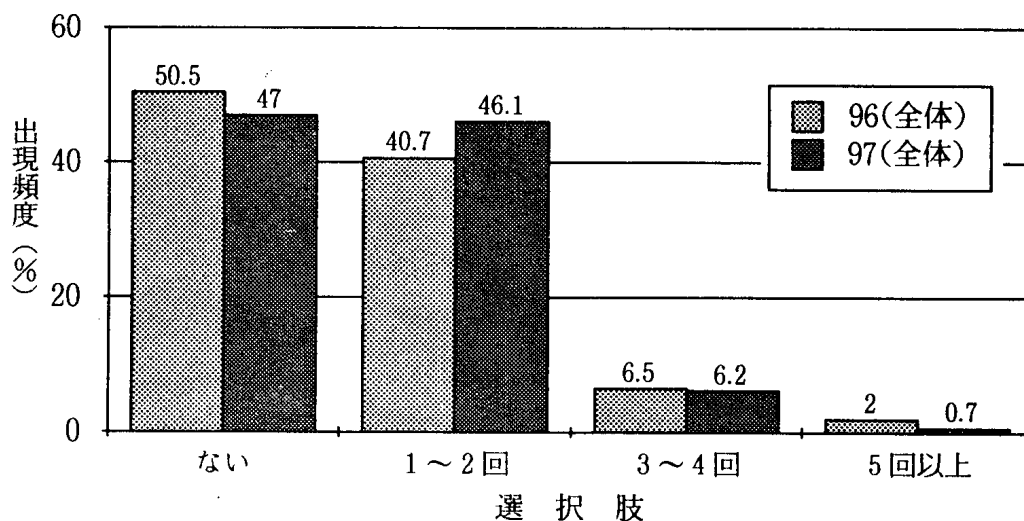


図4 「授業欠席回数」の各選択肢に対する出現頻度

でみると、情報社会学科が58.9%と一番高く、商経科が43.2%、英語科が46.0%となっており、情報社会学科が他学科に比べて出席率が良いことも判った。

### 授業での理解を高める要因

授業での理解をより促進させる要因の一つとして、教材や機器の活用方法があげられる。そこで、これらの要因について学生達がどのような評価をしているかを検討してみる。

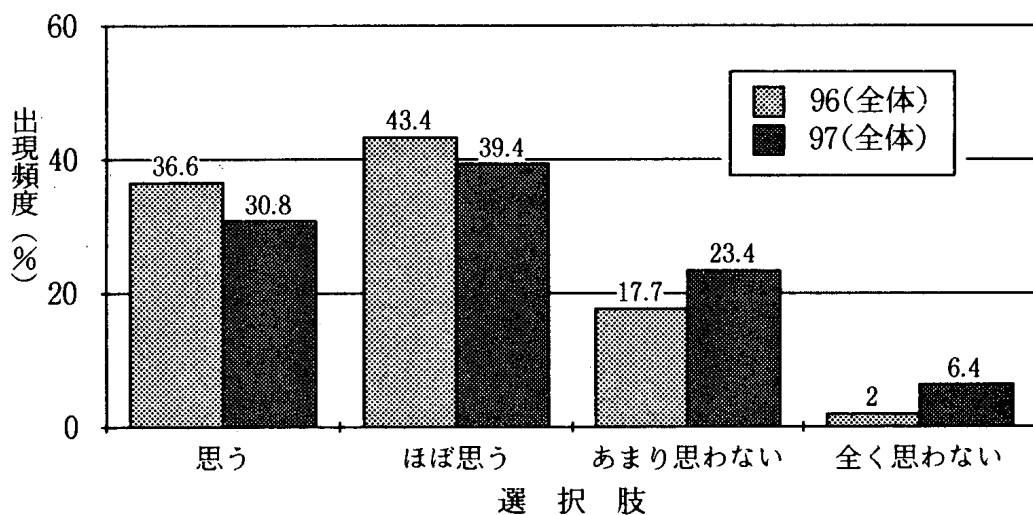


図5 「テキストは適切であったか」の各選択肢に対する出現頻度

まず、教材として利用されたテキストが、授業を受けるにあたって適切であったかという質問に対して、図5からも判るように全体として約70%の学生が適切であったと判断している。しかし、前年度と比較した場合10ポイントほど減少している。この傾向は、男子学生になるほどはっきりとマイナスの評価をしており、不適切率が35.9%も占めており注目される点である。また、授業に対して意欲的に取り組まなかったと考える学生では、41.1%にまでなっており批判的な結果を示している。さらに、シラバスを事前に読むことによって、授業についての理解を深めていた学生と、それをしていなかった学生との間で検討した結果が表2で



ある。事前に理解をしていなかった学生の中で、テキストが適切であると評価している学生は、19.9%とあきらかに低く、やや適切と考えている学生を加えても57.2%と半数にしかならず低い評価となっている。このようにテキストに対する学生の評価は、費用の側面と関係しているためか、厳しい評価内容となっている。

表2 シラバスの利用の違いによるテキストの適切度

「テキストの適切度」	「シラバスを読み予め理解していたか」			
	人数	全体	そう思う	思わない
そう思う	129	30.8	40.6	19.9
ほぼそう思う	165	39.4	41.5	37.3
あまり思わない	98	23.4	16.6	30.8
全くそう思わない	27	6.4	1.4	11.9
合 計	419	100	100.1	99.9

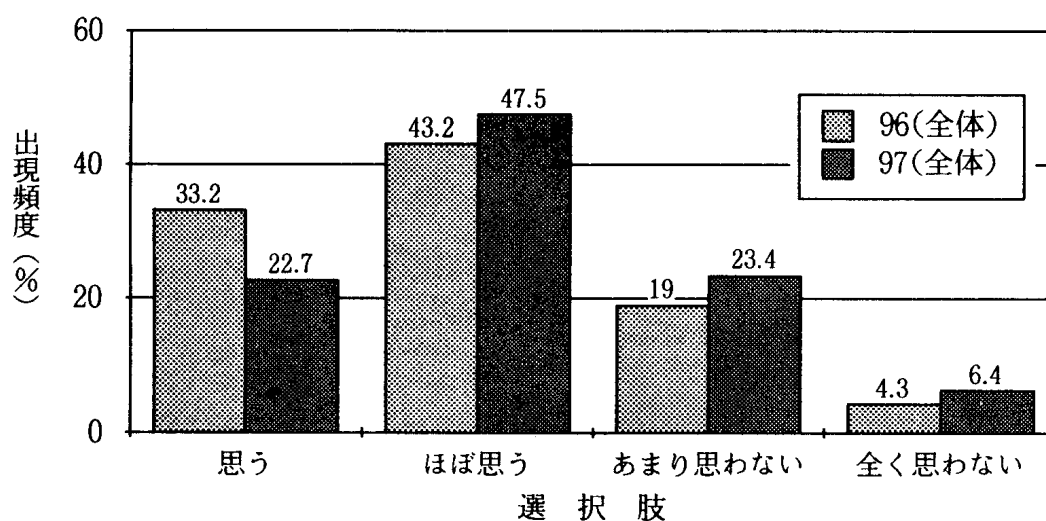


図6 「教材や機器の使用は適切であったか」  
の各選択肢に対する出現頻度

一方、ホワイトボードや教材機器の使用についての評価をみたのが図6である。授業中に利用が十分になされていると思っている学生は22.7%で、前年度に比べて10.5ポイントも減少を示している。このことから、授業における活用方法として問題があるのではないかと考えている学生

が増加していることが判る。これを男女間で検討してみると、男子学生で32.9%が問題があるとしており、それに対して、女子学生では28.2%と低くなっていることから、男子学生に多くの批判的評価がみられている。更に、授業に対して意欲的に取り組んだ学生（25.5%）よりも、意欲的に取り組まなかった学生（37.4%）の方が批判的傾向が高かった。また、学科別にみると英語科学生が29.8%、商経科学生が29.5%、情報社会学科学生が31.6%といった評価がなされており、教員の教材機器等の活用について十分でないといったマイナスの評価がみられる。特に、受講する科目の多い情報社会学科学生において、活用が不適切であるといった気持ちが高い傾向がみられており、教材や機器の活用方法が授業内容と深く関係すると判断できることから、今後の十分な検討が必要である。

#### 授業における指導方法の要因

授業を受けた時の先生の指導方法について、学生達がどのように評価しているかを検討するために、先生の話し方についての評価を整理した結果を示したのが図7である。授業中、先生の話し方が聞き取りやすい

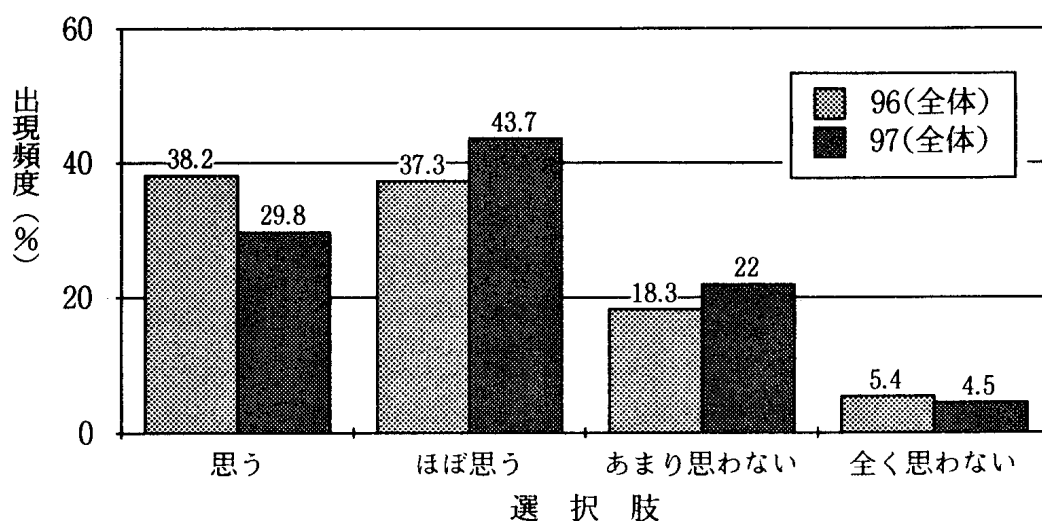


図7 「聞き取りやすい話し方がなされたか」  
の各選択肢に対する出現頻度

方であったと評価している学生は29.8%であった。これは、前年度に比べて8.4ポイント減少している。そこで、ほぼ聞き取りやすかったと思うと判断した学生を加えてみると73.5%になった。しかし、前年度が75.5%であったことから、全体として先生の説明する時の話し方が悪くなっているといったマイナスの評価傾向にあるといえる。また、この傾向を男女間の違いでみると、男子学生が34.8%であるのに対して、女子学生は21.5%とその差は13.3ポイントにもなっている。すなわち、男子学生ほど先生の説明が聞き取りにくい話し方であると思っており、性別による違いがはっきりとみられた。

また、授業に意欲的に取り組んだと考えている学生は、先生の話し方について、聞き取りやすかったと評価しているのが35.9%。ほぼ聞き取りやすかったが44.0%で、全体としてみるなら、79.9%の学生がプラスの評価を示している。それに対して、意欲的に取り組めなかった学生では、聞き取りやすい話し方であったと評価している学生は、わずか9.6%しかなく、その差は26.3ポイントの大差となっている。しかし、ほぼ聞き取りやすかったという評価では、両者の間には差がみられず43.0%であった。このようなことから、意欲的に取り組めなかった学生の場合でも、全体としては62.6%と半数以上がプラスの評価をしているが、結果的には意欲的に取り組んだ学生に比べて低い評価になっていることが判った。

表3 シラバスの利用の違いによる話し方の評価

「聞き取りやすいか」	「シラバスを読み予め理解していたか」			
	人数	全体	そう思う	思わない
そう思う	125	29.8	35.9	22.9
ほぼそう思う	183	43.7	49.3	37.8
あまり思わない	92	22	13.4	31.3
全くそう思わない	19	4.5	1.4	8
合 計	419	100	100	100

問題を検討するために、授業を受ける前のシラバス等による理解度によって、どのような違いがみられるかを分析した結果が表3である。事前に授業の目標を理解していた学生は、全体として先生の話し方についてプラスの評価（85.2%）をしている。それに対して、十分に理解できなかった学生の39.3%は、先生の話し方に問題があり、聞き取りにくかったと指摘している。さらに学科別での検討では（表4）、情報社会学科学生の評価が他学科の学生よりも、マイナスに評価する傾向を示しており、その出現頻度は41.1%にもものぼっていることが判った。

一方、授業における指導の方法について、学生がどのように評価して

表4 学科別による話し方の評価

「聞き取りやすいか」	「所属学科」				
	人数	全体	英語科	商経科	情報社会学科
そう思う	125	29.8	32.2	33.8	17.9
ほぼそう思う	183	43.7	51.7	41.5	41.1
あまり思わない	92	22	13.8	20.5	33.7
全くそう思わない	19	4.5	2.3	4.3	7.4
合 計	419	100	100	100.1	100.1

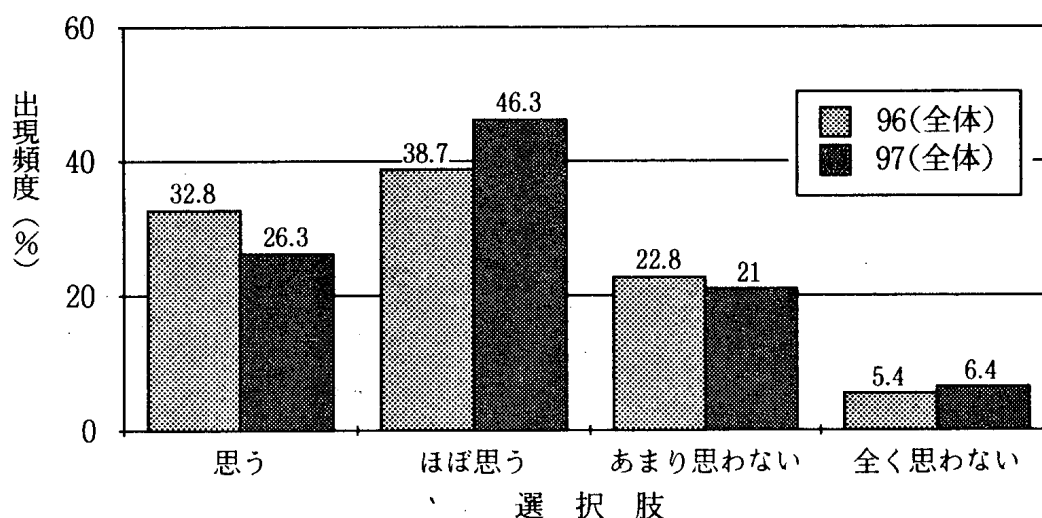


図8 「学生の理解度を把握して説明されたか」の各選択肢に対する出現頻度

いるかを検討するためにみたのが図8である。それによると、学生の理解度に合わせて説明ができていたと評価する学生は26.3%で、前年度に比べて6.5ポイントマイナス傾向を示している。そこで、ほぼ理解度に合わせて教えられていたと評価した学生（46.3%）を加えた上で検討してみると、全体としてプラス評価をした学生は72.6%で、前年度とほぼ同じ傾向にあることが判った。これを男女間による比較（表5）をしてみると、男子学生では理解度に合わせた教え方であると評価したものが19.5%に対し、女子学生では31.0%となっており、その差が11.5ポイントもみられた。したがって、男子学生ほど、学生の理解度を十分に把握せずに授業が進められていると不満に思っており、その批判的な評価は

表5 性別による学生の理解度把握に対する評価

「学生理解度を把握」	「性 別」			
	人数	全体	男子学生	女子学生
そう思う	110	26.3	19.5	31
ほぼそう思う	194	46.3	48.2	45.2
あまり思わない	88	21	23.2	19
全くそう思わない	27	6.4	9.1	4.8
合 計	419	100	100	100

32.3%にもなっていることが判った。それでは、授業に対して意欲的に取り組んだと考えてる学生の評価はどうであろうか。結果によると、78.0%の学生が理解度に合わせて授業が進められているとプラス評価をしている。それに対して、意欲的に取り組めなかったと考えている学生では、63.3%に減少し、逆に十分に理解しているかどうかを把握しないで説明しているといった、批判的な評価が36.7%も占めており、事前にシラバスなどで理解をしていなかった学生の評価の傾向と一致していた。

### 授業に対する理解度

授業を受講した結果、学習内容をよく理解することができたかどうか

の評価結果が図9である。授業内容をよく理解できたと評価している学生は23.4%で、前年度とほぼ同じ傾向であった。また、ほぼ理解できたと思うと評価した学生の場合は48.4%であり、全体的にみると67.7%の学生が理解できたことを示している。それに対して、十分に理解できなかったと評価している学生は28.2%で、前年度に比べて減少していることが判った。この傾向は、男女間や学科間の間において大きな差がみられなかった。しかし、授業に対して意欲的に取り組んだと考えている学生と、そうでない学生の間では図10に示すような結果がえられた。結果

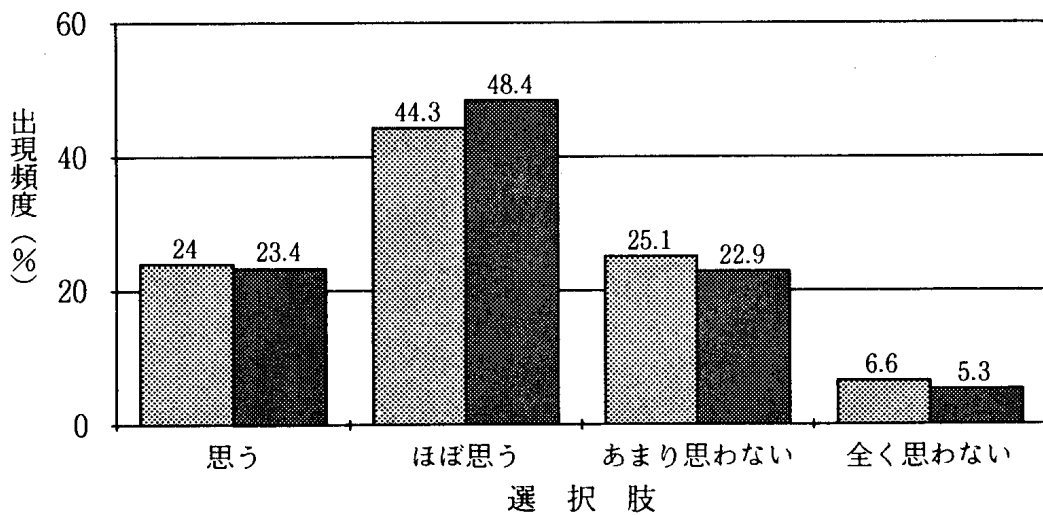


図9 「授業内容を理解できたか」の各選択肢に対する出現頻度

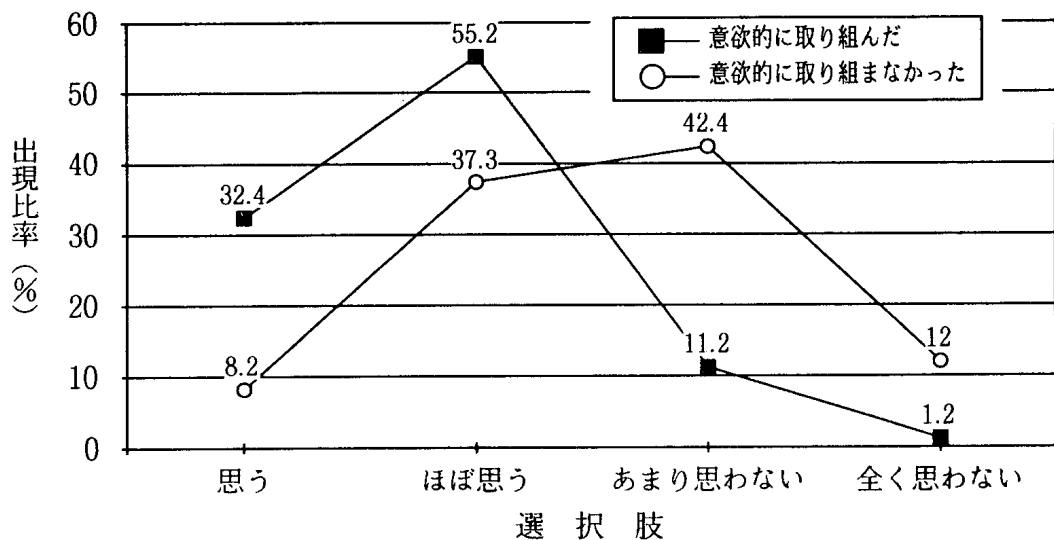


図10 授業に意欲的に取り組んだか、取り組んでいないかの違いによる授業理解ができたかに関する比較

によると、意欲的に取り組んだと考える学生の87.6%は、ほぼ理解できたと評価しているが、意欲的に取り組めなかったと考えている学生では、半数の45.5%にとどまっている。すなわち、意欲的に取り組めなかった学生の半数にあたる54.4%の学生が、十分に授業内容を理解できなかったと評価しており、これは、今回の調査対象学生の20.0%にもなっていることに留意しなければならない。この理解度について、シラバスを事前に読んで授業に対する理解をしていた学生と、しなかった学生の間で検討してみると表6に示すように差が明確にみられた。特に、事前に理解を十分にしていなかった39%の学生が、授業内容を大なり小なり理解

表6 シラバスの利用の違いによる授業理解度

「授業理解できたか」	シラバスを読み予め理解していたか			
	人数	全体	そう思う	思わない
そう思う	98	23.4	29.5	16.9
ほぼそう思う	203	48.4	53	43.3
あまり思わない	96	22.9	17.5	28.9
全くそう思わない	22	5.3	0	10.9
合 計	419	100	100	100

きなかったと評価している。このことは、シラバスの内容や利用の仕方も含めて、今後の大きな検討課題であると考えられる。

一方、理解できないのは、授業のレベルが学生自身にあっていなかったために生じたのではないかといった問題について検討するために、授業のレベルが各学生にとって適正であったかどうかの評価をみた結果が、図11である。それによると、適正なレベルと評価している学生は20.5%であるが、全体としては70.4%の学生が授業の水準と自分の水準が合っていたと評価をしている。したがって、情報系の授業が高度で難しいといった問題はなさそうである。

また、男女間で検討した授業レベルの適切度は、男子学生の68.3%が適切であったと評価しているのに対し、女子学生は71.8%とやや高い評

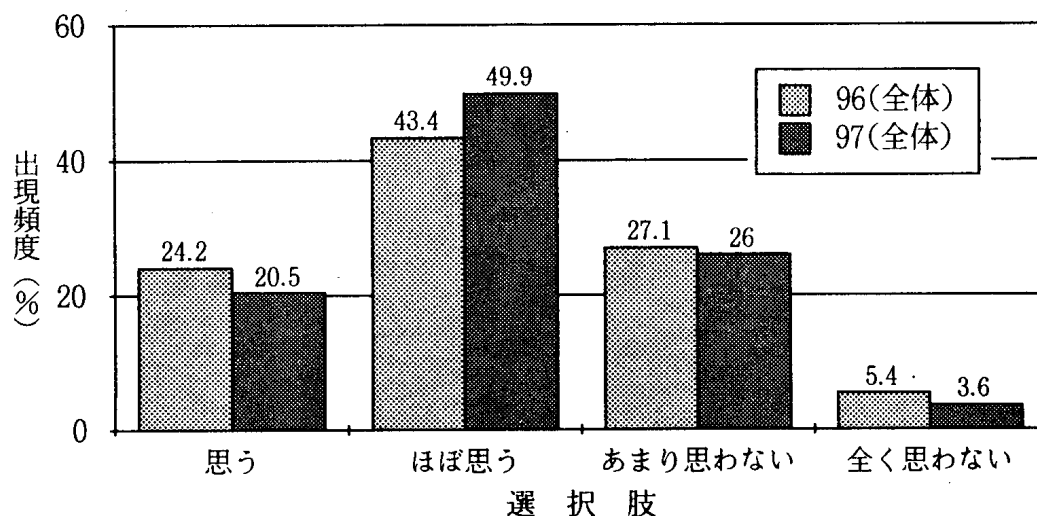


図11 「授業レベルは適切であったか」の各選択肢に対する出現頻度

価を示している。同じように、授業に対して意欲的に取り組んだと考えている学生は、取り組まなかった学生よりも授業レベルの適切度を高く評価する傾向がみられている。また、シラバスなどによる学習目標について事前に検討できている学生と、そうでない学生との間でも差がみられている（図12）。すなわち十分な事前理解ができている学生では、81.5%が授業レベルが適切であるといった良い評価をしている。それに対しシラバスなどの検討が不十分であった学生は、41.8%が授業レベルが

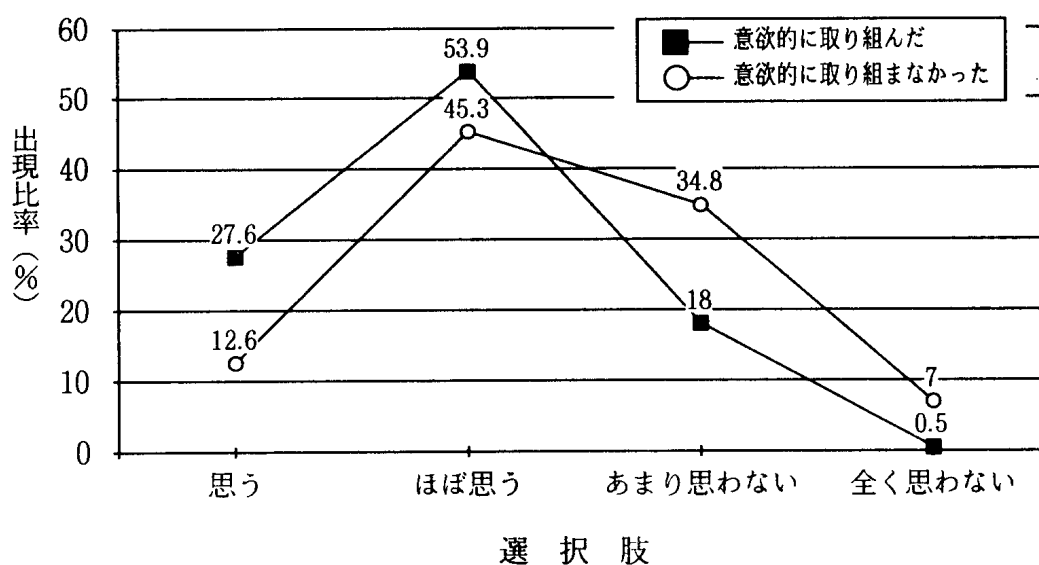


図12 シラバスを事前に理解したか、理解していないかの違いによる授業レベルの適切度に関する比較



合っていないと感じており、これも今後の検討課題として残された。

### 授業に対する満足度

情報系の授業を受講した結果、自分にとって意義のある授業であったかどうか、といった学生自身の自己点検評価の結果が図13である。結果からも判るように、授業を受講して有益であったとはっきりと評価している学生は45.3%で半数近くみられ、これは前年度よりわずかであるが増加している。また、ある程度有益であったと評価している学生が41.5%であることから、全体としてみると86.8%にも達している。この評価の傾向は、前年度に比べて7.4ポイントも増加しており、情報系

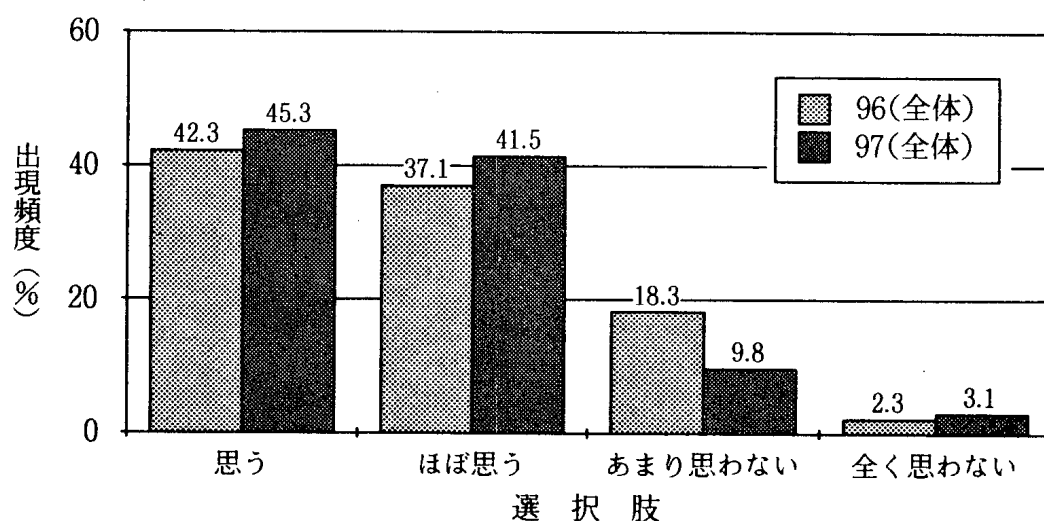


図13 「授業は有益であったか」の各選択肢に対する出現頻度

の授業に対する満足度が上昇していることが判る。このような傾向は男女間でも同じであり、大きな差はみられない。また、学科別に授業に対する満足度の違いをみると表7で判るように、英語科と商経科の学生間には差がみられないが、情報社会学科の学生と他学科の学生の間では、情報社会学科の学生の方が満足度がやや低くなっていることが注目される。また、当然のことながら、授業に意欲的に取り組んだ学生は、授業が有益なものであったと94.6%の学生が高く評価している。さらには、

表7 学科別による授業の満足度

「授業は有益か」	「所属学科」				
	人数	全体	英語科	商経科	情報社会学科
そう思う	190	45.5	47.1	46.8	41.1
ほぼそう思う	174	41.6	44.8	40.3	41.1
あまり思わない	41	9.8	6.9	9.9	12.6
全くそう思わない	13	3.1	1.1	3	5.3
不明	1				
合 計	419	100	99.9	100	100.1

事前に授業の目標などを理解して授業を受けた学生では、96.7%が有益であったと評価している。それに対して、十分に理解していなかったと考えている学生では、満足度が76.5%に減少しており、その間には20ポイントの差が現れていることが注目された。このようなことから、授業を受ける前のいろいろな情報が、学生にうまく受け入れられているかどうか、その後の授業での学習効果につながっているともいえる。

## 考 察

情報教育授業アンケートのデータに基づいて、その内容を検討してきた。それによると、受講学生は情報教育系科目に対して関心が高く、社会に出てからも必要な科目であると評価している。したがって、授業に対する関心も強く、できるだけ自分なりの学習効果を得たいといった積極的な意識が働いていることが判った。ところが、授業を受講した結果、授業のあり方について不満な気持ちを持っている部分があり、それがマイナス評価として示された。今回の調査結果では、特にシラバスに示された授業の内容や学習目標について、十分に理解せずに受講した学生にとっては、自分の考えていた授業ではないといった気持ちを強く感じているのが特徴である。すなわち、シラバスを十分に理解できずに授業にのぞんだ学生は学習効果が低く、それだけ授業に対するマイナス評価もっていることが判った。この結果に対して、シラバスを十分に理解し

ないで受講した学生に問題があるのではないか、といった反論の意見が予測される。したがって、授業をしている教員の指導上の問題よりも、学生自身の学習態度に問題があると考えてしまいやすい。しかし、選択科目のような場合であれば、ある程度そのような説明ができるかもしれないが、必修科目になっているものが多い時点では、必ずしもそのような考えで結論を出すことは難しいと判断される。それよりもむしろ、教育指導上からシラバスの活用や理解をいかに進めるのかについて検討する必要がある。たとえば、学生にシラバスを十分に読ませればこのような問題が解決するだろうか。確かに、シラバスの読み方や利用の方法を指導することによって、各科目の授業内容の認識を明確にすることができる。それにより、学生が受講するときの授業水準の判断や、授業に取り組む姿勢を自ら変えるための有効な情報になると考えることはできる。しかし、受講したくないと思っても必ず受講しなければならない必修科目の場合はどうなるであろうか。そのような時こそ、シラバスの内容によって学生達が授業に意欲をわかすことができるかどうかといった点が問題になると考えられる。

現在、本学の出している講義や演習内容のシラバスについて、その表記や内容について十分に検討され、共通性のマニュアルにもとづいて作成されているとはいいがたい。当然のことではあるが、授業内容の記述は各担当者にまかされている。そのため、各教科担当者の意図と受講する学生が求めている情報との間に差が生じる傾向が見られる。シラバスに対する教員の姿勢や考え方によっては、学生のもとめる意識との間に大きな差が生じ、結果的には学習効果を高める方向に作用していないとも考えられる。より授業をスムーズに展開し、受講学生にとって理解しやすく有益なものにするためには、シラバスの作成方針を含めた再検討は是非必要なことと思える。

一方、授業の教え方に対する評価結果についても、教員自身の問題として検討しなければならないだろう。今回の調査結果では、7割近くの

学生が概ね理解できるように説明がされていたと良い評価をしている。ただし、全ての学生がもろ手をあげて賛意を示しているわけではなく、全体的にみれば教え方についてもっと検討の余地が含まれている回答も含まれていると解釈すべきであろう。なぜなら、マイナス評価を示した3割の学生について検討するなら、教え方に不満があることを明確に意志表示していると判断することができるからである。すなわち、マイナス評価学生にしてみると、授業における説明が学生の理解を無視し、先生本位で話されていることを指摘しているともいえる。ただ、このような評価に対して、教員側の主たる説明として、大学は自発的に自ら学習する場であることが強調されている。したがって、学生自身の学習に対する意欲や能力について問題にすべきであるといった、伝統的な考え方が潜在的に残っていることも事実である。このような教員の意識と、授業は教えてもらうものといった学生の習慣的なスタイルによる意識のズレが、学生と教員の間に差を生みだし、結果として、学習困難な学生を生み出す原因にもなっていると予測することができる。このような観点に立つならば、大学で授業を担当する教員は、時代の変化に応じた大学教育のあり方が求められていることを認識する必要があると考えられる。とくに、今日の大学における教育の姿勢として、学習者自身の立場に立って授業が実施される必要があるといった基本的な考え方が、大学教育の中でどのように生かされるかに焦点が集中してきているのではないだろうか。

学問の世界では、専門的な研究姿勢や内容が重視されるべきである。また、大学においても、そのような考えは重要な意味を持っている。しかし、その一方で大学教育の一般大衆化が進んできており、教育内容や指導のあり方が大きく変化しなければならないことについて、大学人は認識しておく必要がある。高校進学率がほぼ100%になり、大学進学率も同様の傾向を示しだしてきている今日では、大学教育の大衆化は避けて通れないことである。その中で、専門性を生かした大学教育のあり方

をどのように生みだしていくのかが、大きなテーマとしてうかびあがってきている。時代の流れを敏感にくみ取り、新しいスタイルで時代を生きを求める若者達に、その時代にあった方法で理解できる教育方法をつくりだしていかななくてはならない時期にきているといえる。そのような観点から授業の進め方について、教員一人一人が個々の授業内容の点検をする必要があるといえる。

一方、技術革新にともなって新しい教材機器が開発されてきている。したがって、授業を補助する教材や機器の利用についても十分な検討が必要である。特に、情報系の科目では演習形式が多いため、実技的な実習に時間が多く使用される。実習そのものは教員の説明によって進められるので、個々の学生にとってのわかりやすさが重要である。だからこそ、教育機器の利用を十分に検討し活用していく必要がある。また、教員側が必要とみて定めたテキストのような教材についても、時間の都合で十分に使いこなせていない場合や自己学習用として参考にしてもらうといった程度の考えから定めている場合もあると思われる。たとえそのような場合でも、学生にその教材の利用方法を授業時間内において十分に説明する必要性があると、調査結果から判断できるので再検討が求められる。

今回の授業アンケートを通して、情報系の授業を8割以上の学生が、大なり小なり有益で満足であったと判断していることは、非常に重みのある評価だと考えられる。学生にとって必要な授業であり、授業が有益であったと評価しているからこそ、その授業内容の質が教員一人一人に問われるのではないだろうか。今回の調査は新学科の設置前と、設置後のデータを比較しながら検討をした。新しい情報社会学科の学生は、情報系の授業内容について厳しい評価を示している。それは、専門的に進められる情報社会学科の学生だからこそ、日常の授業内容について、現実的な授業内容のあり方についての問題を提議していると判断すべきだろう。各学科の学生達が情報系の授業に求める条件を全て満たすことは

できないにしても、教材のあり方や教員の指導方法の研究については十分に研究し対応できることであり、個々の教員の義務として努力する必要がある。そのような教員の努力によってこそ、授業内容の向上を生みだすことができるのだと考えられる。そのことが、結果的に学生の学習態度の変容を生みだすことになり、授業における学習効果として、質の向上を生みだすものになってくると、今回の調査結果から結論づけることができる。

最後に、授業評価の試みは、大学にとって今後とも重要な課題であり、大学教育の改善に有効な手段と考えることができる。今後の課題としては、このような調査を通して、学生の学習意欲を高める要因として考えられるシラバスの内容や授業方法の検討、あるいは授業における教員と学生のコミュニケーションや、信頼性といった人間関係の問題についても検討していく必要があると判断された。

### 【参 考 文 献】

- 河口信恵・高本明美・藤井美知子 1995 短大・情報系学科を希望する学生の意識調査 情報処理教育研究集会講演論文集, 283-286
- 小島浩司・白井靖敏 1995 女子大学・短期大学における情報教育の在り方(2) 情報処理教育研究集会講演論文集, 315-318.
- 白井靖敏・小島浩司 1995 女子大学・短期大学における情報教育の在り方(1) 情報処理教育研究集会講演論文集, 311-314.
- 高橋 宗・村田栄子 1994 短期大学における情報教育内容の検討ー入学時の調査に基づく情報教育への取り組みー 第8回私情協大会資料, 53-54.
- 玉田和恵 1995 情報処理科目の変化と学生意識の変化 情報処理教育研究集会講演論文集, 339-342.
- 西村弘之 1995 学生による授業評価の分析 情報処理教育研究集会講演論文集, 363-365.

山田恒夫・吉田光雄・原田 章・中西通雄 1995 情報活用科目受講者  
におけるコンピュータリテラシーの個人差とその学習課程への影響  
情報処理教育研究集会講演論文集, 347-350.